

## 1 第28回大会について

去る5月25日(金)に、青山学院大学において開催され、1件のシンポジウム、6件の研究発表が行われました。発表者と司会者の皆様、お疲れさまでした。また、ご参加いただいた会員の皆様には、熱心にご清聴いただき、また、貴重なコメントや質問をお寄せいただき、誠にありがとうございました。40名の方が出席された懇親会では、学問的話題に花が咲き、瞬く間に90分が過ぎゆきました。

今大会の参加者数は79名でした。どうか会員の皆様には、次回も万障お繰り合わせの上ご出席を賜りますようよろしくお願い申し上げます。(表の下段に懇親会参加者数も示しておきました。)

2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
約70	72	84	約100	約80	72	85	79
約50	約30	32	45	25	39	38	40

なお、開催校の秋元実治名誉教授、中澤和夫教授、山本史歩子准教授には、開催校決定以来一方ならぬお世話になりました。快適な施設をご提供くださった大学関係者の皆様と併せ、ここに厚く御礼を申し上げます。

## 2 第30回大会について

次回大会は、日本英文学会大会から独立して開催されます。時期と開催校の詳細は未定ですが、総会で報告されたとおり、「7月に、中部地区の大学で」開催すべく、現在詰めの段階にあります。決定され次第、協会ホームページでお知らせいたします。また、ニューズレター冬号でお知らせいたします。

今回は30周年記念の大会として、小倉美知子慶応大学教授にシンポジウムの企画をお願いすることが理事会で決定され、着実に準備が進められています。テーマ・講師等、詳細はニューズレター冬号でお知らせいたします。

個人研究発表の締め切りは2013年1月31日(木)となっております。発表をご希望の方は、350字程度の要旨に氏名・所属・職位・略歴・連絡先(住所、電話番号、e-mailアドレス)を添えて、下記宛てにお申し込み下さい。

電子ファイル(MSWordの添付ファイルとそのpdf.)による場合  
nakamura@for.aichi-pu.ac.jp

フロッピーディスクによる場合  
〒480-1198  
長久手市茨ヶ廻間1522-3  
愛知県立大学外国語学部

中村不二夫

### 3 第 19 回近代英語協会最優秀新人賞ならびに優秀学術奨励賞の選考結果について

1 名の応募者があり、編集委員会による厳正なる審議の結果、次の方が優秀学術奨励賞に選ばれました。ますますのご研鑽をお祈り申し上げます。顕彰は、第 30 回大会の総会で行われます。授賞理由は、ニューズレター冬号および『近代英語研究』29 号に掲載されます。

受賞者

初山陽子氏（愛知県立芸術大学大学院博士後期課程）

受賞対賞論文

「初期近代英語期の声楽作品による当時の発音の推定」

（『近代英語研究』第 28 号, pp. 1-22）

既にご案内のとおり、賞には、最優秀新人賞と優秀学術奨励賞の 2 種類があります。若手による当該年度の掲載論文の中から、前者は特に秀でている論文に、後者は、最優秀新人賞には至らないが将来性を感じさせ優れていると評価された論文に与えられます。論文応募の際、「執筆者情報ファイル」の該当欄に（√）をご記入いただくだけで結構です。選考対象は、「協会誌への掲載が可となった、投稿締切日時時点で 37 歳以下の、または修士号取得後 10 年以内の執筆者による論文のうち、原稿応募時に「執筆者情報ファイル」において賞の選考を希望する意思が表明されていた論文」（選考規程第 2 条より）です。最優秀新人賞には表彰状と記念品が、優秀学術奨励賞には表彰状が授与され、その荣誉が讃えられます。

### 4 『近代英語研究』第 28 号の発行について

第 28 号は予定どおり刊行され、大会ご出席の会員の方々には当日お渡しいたしました。当日ご欠席の会員の方々には、このニューズレターとともに同封申し上げました。

### 5 『近代英語研究』第 29 号の原稿募集について

第 29 号（2013 年 5 月発行）の投稿締め切りは 2012 年 9 月 15 日（土）となっております。奮ってご応募ください。審査は匿名で行われます。投稿規定・応募要領等は、『近代英語研究』の巻末、または協会ホームページ左下「出版物」の中の「投稿要領」をご覧ください。応募原稿、同電子ファイルの送付先は次のとおりです。

電子ファイル

hideshi.ohno@gmail.com

打ち出し原稿

〒712-8505

倉敷市連島町西之浦 2640 番地

倉敷芸術科学大学産業科学技術学部

大野英志

## 6 理事の交替について

ニューズレター2011 年夏号でお知らせしたとおり、本年 4 月 1 日から、新理事として、中川憲氏（安田女子大学）、前田満氏（愛知学院大学）が就任されています。

また、本年 3 月 31 日付をもって定年規定により勇退された秋元実治氏と米倉 緯氏、2013 年 3 月 31 日をもって 2 期 4 年の任期満了をお迎えになる大沢ふよう氏、浮網茂信氏、堀 正広氏に代わり、新理事として大門正幸氏（中部大学）、太田聡氏（山口大学）、鈴木敬了氏（大東文化大学）、村上まどか氏（実践女子大学）、脇本恭子氏（岡山大学）が推薦され、ご本人からご快諾をいただきました。任期は、いずれも、協会創設 30 周年を含む 2013 年 4 月 1 日からの 2 期 4 年間です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

秋元先生、大沢先生、浮網先生、堀先生には、長きにわたり協会の運営にご尽力いただきありがとうございました。これからもご指導ご鞭撻の程をよろしくお願い申し上げます。

## 7 顧問の補充について

河井迪男氏、宇賀治正朋氏のご逝去に伴い、現顧問が 1 名となったため、中野弘三氏、豊田昌倫氏が推薦されました。

## 8 論文投稿・研究発表応募に関するお願い

編集委員会から、英文チェックを受けていると思えない原稿が増えてきているので周知徹底してほしいという旨の依頼がありました。『近代英語研究』投稿規定に明記されておりますように、英語論文については、英語を母語としない投稿者は投稿前に必ずネイティブ・スピーカーによる原稿のチェックを受けた上でご応募ください。

他誌への二重投稿、他学会研究発表への二重応募は絶対にお止めください。

## 9 会費の「震災免除」希望者について

昨年度の総会において東日本大震災で被災された会員の 2011 年度分の会費を免除することが決定され、ニューズレターでお知らせしましたところ、1 名の方から申請があり、承認されました。一日も早い復興をお祈り申し上げます。

## 10 『近代英語研究』のアーカイブ化について

創刊号から第24号までの協会誌が、独立行政法人科学技術振興機構の「journal@rchive」によってまもなく閲覧可能となります。予定では6～7月頃であるとのことでしたので、7月初旬までニューズレターの発送を遅らせ、待ってみましたが、まだでした。次のURLを入力し、「か」行をクリックなさってください。今月中には閲覧できるものと思います。

現段階では、夥しい数の学協会が日本に存在することを実感していただくためにアクセスしていただだけでも無駄にはなるまいと存じます。アーカイブ化を申請していない学術団体も含めるといったいくつあるのやら、30年続いてきた本協会をますます発展させなければならぬと痛感させられました。

<https://www.jstage.jst.go.jp/AF03S030Init/-char/ja/>

## 11 会費納入のお願い

本年度の大会資料をお届けした4月初旬、開催案内の最後に、会員お一人お一人に過去の会費納入記録を貼り付けてお知らせしました。切り貼りを伴うこの作業は、人と中身を間違えると非礼な事態が生じるため、時間と神経を要します。そのため、ニューズレターをお送りするたびに毎回同封することはご容赦いただいています。どうかいま一度ご確認いただき、漏れのないようお振り込みいただきますようお願い申し上げます。

2009～2011年度分の会費が完納いただけていない場合は未納分を赤色で示してありますので、今年度分と合わせて納入ください。協会の円滑な運営のために、未納分も納入くださいますようお願い申し上げます。本年度大会の開催案内にも記されているとおり、2009～2011年度の納入が一度でも欠けている場合は、このニューズレター7月号での督促が最後の督促となり、11月末日までに納入いただけなかった場合は退会処理に入らせていただきます。猶予を希望される場合は、電子メールか郵便でお知らせください。なお、本状と行き違いにご納入いただいた場合は、悪しからずご容赦ください。

協会の円滑な運営のため、ご協力ください。なお、協会は、別途領収証を発行することは致しておりません。郵便局からお受取りになる領収証（振込用紙の右端の紙片）以上に公式な領収証はございませんので、大切に保管なさってください。会費振込は、協会創設以来、郵便払込取扱票でお受けしています。お手許の郵貯口座あるいは銀行口座から協会の郵貯口座への送金は、会計監査のための書類を作成する際に多大な時間を奪われることとなりますし、会計監査をしていただく方にも極めて複雑な作業を強いることとなりますので、ご容赦ください。決算報告書を作成する時期は、同時に、大会資料の版下原稿の作成・袋詰め・発

送作業、理事会の資料作り、開催校との細かいやりとり等の時期でもあります。どうかご理解を賜りますようお願い申し上げます。

## 12 30周年事業について

### 12.1 方針

1983年5月に産声を上げた近代英語協会は、2013年5月にめでたく創設30周年を迎えます。30周年記念行事の一環として、次の(1), (2)が承認されました。

- (1) 第30回大会（2013年5月）の午前の部は、30周年記念シンポジウムを行う。小倉美知子氏に司会をお願いし、テーマと講師の選定は、小倉氏に一任する。
- (2) 創設30周年を記念し、『近代英語研究第30号』とは別に、30周年記念論文集を刊行する。
  - (a) 積極的に海外に発信するために、全編英語で統一する。
  - (b) 投稿受付期間は、2013年4月1日～8月15日とする。
  - (c) 特別寄稿を、豊田昌倫第3代会長、秋元実治第4代会長、J. Roberts氏～E. v. Gelderen氏に至る過去の外国人特別記念講演者に、前書きを米倉 純現会長にお願いする。
  - (d) 刊行は、31回大会開催に合わせ、遅くとも2014年5月上旬とする。
  - (e) 執筆要領は編集委員会が作成する。
  - (f) 出版に関わる費用は、寄付金と、執筆者負担（理事・一般会員30,000円、学生会員20,000円）によって賄う。
  - (g) 寄付金受付期間は、2012年8月1日～2013年7月31日とする。
  - (h) 上記(a)～(g)を含め、会員への周知は、ニューズレター2012年夏号、冬号、及び協会ホームページによって行う。

### 12.2 30周年記念論文集について

#### 12.2.1 執筆要領

- 未発表の論文に限る。使用言語は英語とする。
- 依頼原稿を除き、全ての原稿は審査される。
- 原稿については、A4用紙を使用し、MS Wordのデフォルト値にしたがって、上35mm、下左右は30mmの余白をあげ、1ページ半角80字×31行、フォントはTimes New Romanで、タイトルは14ポイント、それ以外は12ポイントで設定する。タイトルのつけ方、Abstract（150語以内）の提示の仕方、見出しのつけ方、樹形図・表・用例の提示の仕方、行間の取り方、注番号のつけ方等については、Sample.doc

(協会ホームページからアクセスできます) をモデルとする。

- タイトル・Abstract・本文・図表・注・参考文献等すべてを含めて、15 ページ以内とする。
- 原稿の受付は 2013 年 8 月 15 日を締め切りとする。編集幹事(hideshi.ohno@gmail.com)宛に電子メールで、次の2種類のMS Word ファイルを送ること：①原稿本体、②執筆者の情報(氏名、論文タイトル、略歴、住所、電話番号、所属先、メールアドレス)と部門名(「音韻論」「形態論」「語彙論」「統語論」「語用論」「意味論」「文体論」等)。
- 投稿時に打ち出し原稿を①、②ともに1部ずつ提出すること。なお、①の表紙右上に部門名を朱書すること。締め切り日は2013年8月15日とする。

宛先：〒712-8505 倉敷市連島町西之浦 2640

倉敷芸術科学大学 産業科学技術学部 大野英志

電話・FAX 086-440-1174

## 12. 2. 2 刊行までの流れ

### 2012 年

5 月 25 日	執筆要領・見本の決定
7 月	ニューズレター夏号、ホームページによる投稿案内
8 月 1 日	寄付金受付開始
12 月	ニューズレター冬号による投稿案内

### 2013 年

4 月 1 日	原稿募集開始
8 月 15 日	応募論文、依頼原稿締切り(厳守、特例なし、消印・電子メールによる送信は深夜 0 時まで有効、打ち出し原稿は消印有効)
11 月	掲載可否の通知、e-mail の添付ファイル(または FD)による論文送付依頼、書き直し依頼
12 月中頃	再査読依頼

### 2014 年

1 月初旬	再審査結果報告
1 月中旬	査読結果の通知、e-mail の添付ファイル(または FD)による論文送付依頼
1 月末	すべての原稿の添付ファイル(または FD)到着、表紙・目次・奥付等の作成
2 月	CD-ROM 作成
3 月	出版社へ入稿

## 12. 2. 3 執筆見本 (Sample.doc いつでも協会ホームページでアクセスいただけます。)

## &lt;Opening and Citations&gt;

## Gradual Parametric Change?

Revisiting the Loss of Non-Nominative Experiencers of *Like*\*

This paper investigates the replacement of dative/accusative Experiencers of *like* by nominative ones in the history of English. The literature on this issue has traditionally supposed that this change was caused by the decline of the dative case ending. However, Allen (1995) reveals that there was a substantial time lag between the decline of the morphological dative and the loss of non-nominative Experiencers and that nominative and non-nominative Experiencers coexisted for more than a century. This is problematic for the view of the language change endorsed by the principles-and-parameters approach, which claims that changes of this kind should occur in an abrupt and radical fashion. To reconcile this paradox, I put forth an analysis that makes use of two parameters, maintaining that the emergence of nominative Experiencers was enabled by the decline of the morphological dative, while the loss of non-nominative Experiencers stemmed from the loss of verb second. This analysis can also account for residual non-nominative Experiencers in Modern English.

## 1. Introduction

Studies in historical syntax within the generative framework generally assume that grammatical changes result from the resetting of parametric values that are innately built into human language. Since generative grammar makes a strong claim that parameter setting is a once-and-for-all process, carried out when children acquire their mother tongue, it is predicted that grammatical changes also take place catastrophically. This expectation, however, is often betrayed by the historical data recorded in the literature. This is the case when a syntactic property X changes into another property Y through an intermediate stage where X and Y are both allowed. Given that X and Y are phenotypes of a relevant parameter P, the discrepancy between the presumed parametric change and the actual data change can be illustrated as in (1).

- (1) a. parametric change:  $P(x) \rightarrow P(y)$   
 b. actual data change:  $X \rightarrow X/Y \rightarrow Y$

This situation presents a serious challenge to the generative approach to grammatical changes, particularly in cases where a single speaker (with a single parametric value) equally accepts both X and Y.

\*SNIP\*

(4) a. Experiencer-Theme

hu	him	se	sige	gelicade
how	him-Dat	the-Nom	victory-Nom	liked
'how the victory had pleased him'			(Or 84.32 / Denison (1993: 72))	

b. Theme-Experiencer

ge	noldon	gode	lician	on	godum	ingehyde
you-Nom	not-would	God-Dat	like	in	good	understanding
'You would not please God with good understanding.'						
(ÆCHom II, 44 332.160 / Allen (1995: 146-147))						

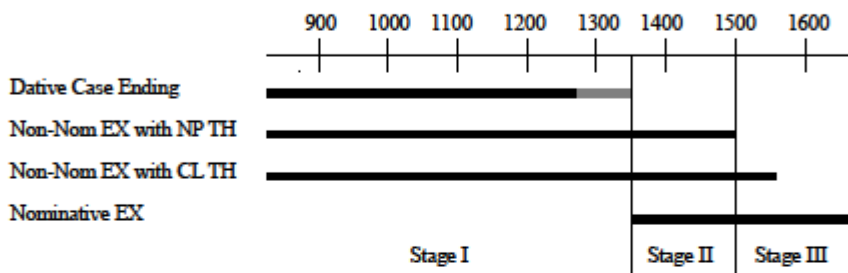
\*SNIP\*

Interestingly enough, we can also find non-nominative Experiencers in Chaucer's writings such as the following:<sup>1</sup>



<Figure>

To sum up, according to the survey by Allen, the chronological relation among the decline of the dative case ending, the emergence of nominative Experiencers, and the loss of non-nominative Experiencers can be summarized as in Figure 1. This timetable is based on the Midland and Southern dialects. The gray shading of the dative case ending indicates that the residual dative suffix *-e* can only appear in the environment where nouns are selected by prepositions:



**Figure 1.** The Chronological Relation between the Loss of the Dative Case Ending and (Non-)Nominative Experiencers of *Like*

Throughout OE and early ME, only non-nominative Experiencers appeared both in the NP-TH and CL-TH constructions (Stage I). In the mid-14th century, nominative Experiencers were introduced in addition to non-nominative ones (Stage II). By the beginning of the 16th century, non-nominative Experiencers came to be limited to the CL-TH construction, and were eventually lost during this time (Stage III).

<Tree Diagram and Table>

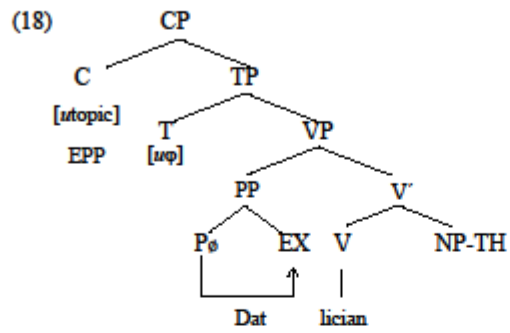


Table 2

Frequency of *Preyen* and *Bisechen*

	Chaucer	Gower	Langland
<i>preyen</i>	169	38	7
<i>bisechen</i>	26	17	2

## NOTES

- \* This research was supported in part by Grant-in-Aid for Young Scientists (B) from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, Grant No. 21720176. I would like to express my gratitude to anonymous reviewers for providing me with useful comments and suggestions on an earlier version of this paper. All remaining errors are my own responsibility.
- 1. Unless otherwise indicated, examples are cited from the *Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, 2nd edition (Kroch and Taylor (2000)) and from the *Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (Kroch, Santorini and Dierani (2004)). The final line in each example gives an abbreviated filename for the source text followed by the sentence ID from the corpus file.

## REFERENCES

- Allen, Cynthia L. (1995) *Case Marking and Reanalysis: Grammatical Relations from Old to Early Modern English*, Oxford University Press, Oxford.
- Anagnostopoulou, Elena (1999) "On Experiencers," in Artemis Alexiadou, Geoffrey Horrocks and Melita Stavrou, eds., *Studies in Greek Syntax*, Kluwer, Dordrecht, 67-93.
- Ando, Sadao (2002) *Eigoshi Nyumon: Gendai Eibunpoo no Ruutsu wo Saguru [A Short History of English: An Explanation into the Roots of Modern English Grammar]*, Kaitakusha, Tokyo.
- Belletti, Adriana and Luigi Rizzi (1988) "Psych-Verbs and  $\theta$ -Theory," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 219-352.
- Kroch, Anthony and Ann Taylor (2000) *Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, 2nd ed. <http://www.ling.upenn.edu/hist-corpora/PPCME2-RELEASE-3/index.html>.
- Miyagawa, Shigeru (2005) "On the EPP," in Martha McGinnis and Norvin Richards, eds., *Perspectives on Phases* (MIT Working Papers in Linguistics 49), MITWPL, Cambridge, MA, 201-235.

\*\*\*\*\*

協会に関するお問い合わせとご連絡は次をお願いいたします。

- 協会誌について  
大野英志 (hideshi.ohno@gmail.com)
- ホームページについて  
川端朋広 (kawabata@aichi-u.ac.jp)
- その他全般について  
中村不二夫 (nakamura@for.aichi-pu.ac.jp)

私的な事情により、昨年より遅い発行となりましたことをお詫び申し上げます。

(事務局長)